

## 悪戦苦闘の一日（1995年3月号掲載・野村 一夫）

ラジオで震度6の地震であったことを知った。『神戸市地域防災計画』では震度5以上の地震が発生すれば自動的に参集することになっていたと思い、原付バイクで灘消防署に向かった。

悪戦苦闘の始まりは、ロッカールームに辿り着くことだった。ロッカーからやっとのことで作業服を取り出し、早速火災、救助事案との戦いが始まった。

午前9時7分頃、「灘区鹿ノ下3丁目付近で火災が発生している」との通報で出動。国道2号線を通じた時、黒煙の噴き上がる量を見て火災の規模がかなり大きいことを直感した。

現場到着時、1街区の南東側が約1,500平方メートル炎上中で、消火栓は使用不能だったので、現場から西へ約200メートルの位置にある防火水槽に向かった。途中2カ所の消火栓も確認したがやはり使用不能だった。

阪神電鉄大石駅東側の防火水槽に部署し、ホースを約200メートル延長。南東側から延焼拡大中の火災の防御線を街区中央部の、南北に通じる路地と決め、筒先を配備し、放水を開始したが、約10分で水槽は空となり、転戦を余儀なくされた。

続いて南に約100メートルの所に架かっている都賀川の日ノ出橋の上に部署し、放水を再開したが、先ほどの防御線はすでに突破されていた。仕方なく防御線を変更し、消火活動を続けたが、

途中何度も川のゴミが吸管ストレーナー(吸い込み用のホースの口に付けた器具)部にまとわり付き、吸水不能に陥りながらも、午前 11 時 30 分頃延焼阻止に成功した。

しかし、この一方で現場到着時に付近住民から「○○さんが生き埋めになっている」との通報を受けたが、火災の規模や、放水もまだ実施していないという状況下では、助けに行きたいがどうすることもできず、消火活動を進めた。

また消火活動中にも「数カ所で住民が生き埋めになっている」との通報を受け、筒先を現場付近にいた方に渡し、放水目標を指示して、生き埋め現場に向かったが、いずれも問い掛けに応答はなく、また消防隊の器具や人員では救出できる状態ではなかった。

さらに携帯無線機も先発の部隊が使用していたので連絡することもままならず、直接消防署に行くよう説得していると、ちょうどそこへ、火災現場北側の倒壊した文化住宅から助けを求める声がすると、駆け込んできた。14 時 30 分頃だったと思う。

その場所に駆けつけると、灘救急隊が現場到着していた。文化住宅は 2 階建てで 1 階部分が座屈し、1 階の夫婦 2 人が生き埋め状態となっていた。合同で 2 階の畳、床板、1 階の天井をめくり、夫(64 歳)を救出したが、奥さん(63 歳)はタンスと畳の間に挟まれ、さらにタンスの上には建物の瓦礫が覆いかぶさっているため、人力では救出できない状況だった。

そこで現場近くの自動車修理工場からジャッキを借り、タンスを持ち上げて無事救出した。

結局鹿ノ下 3 丁目では 6 ヲ所 12 名の生き埋めがあり、無事救出されたのは 4 名だけで、残りの 8 名は亡くなりました。

このような現場で一刻も早く救出しなければと思う気持ちと、救助器具や人員が足りず救出できず情けない気持ちのジレンマで、自分たちが貧弱であると思った。

この現場では 18 日午前 1 時 30 分まで活動し、現場交替したが、2 時間後には次の火災現場へと向かい、現場活動は続いた。

今回の活動を通じて、携帯無線機がないために、現場と消防車の間を何度も往復することとなり、時間のロスと隊員の疲労とを考えると、今後の課題として隊員全員に小型携帯無線機を貸与できるよう、検討してはと思う。